第93回麻布獣医学会　一般学術演題3

ワクチン未接種母豚・哺乳豚群に発生した豚丹毒およびワクチン予防についての1考察

○吉原　啓介

NOSAIみやざき　家畜診療部　生産獣医療課

【背景】

豚丹毒（以下SE）は急性型の敗血症、蕁麻疹型、慢性型の関節炎・心膜炎型と様々な症状があり、人畜共通伝染病のため屠畜場で発見された場合は屠畜禁止及び全廃棄処分となる。特に敗血症型は被害が大きいためワクチンによる発生予防を提案している。今回ワクチン未接種豚群でSEが発生した事例に遭遇しある知見を得たので報告する。

【発生状況】

稼動母豚約300頭の一貫経営♀LW♂Dで2018年6月初旬に母豚の急死（2頭）および発熱と1頭にSE様皮膚病変が認められ、6月中旬から哺乳子豚（約3週齢）でチアノーゼを呈し突然死する死亡が急増した。この農場のSEワクチン接種状況は不活化ワクチン（App混合）を肉豚60–90日齢の2回接種、母豚群には未接種であった。

【対策】

母豚・雄豚を含めて不活化ワクチンを1ヶ月間隔で2回全頭接種、哺乳子豚については生後3日以内及び離乳舎移動時（約4週齢）に2回接種を行った。肉豚のワクチンプログラムについては継続実施とした。

【対策後の事故の状況】

ワクチン接種後、母豚・哺乳子豚の発症及び死亡事故は減少した。哺乳中の死亡事故推移は発生前の5月　正常産子数739頭に対して哺乳中事故70頭、事故率として9.5%　発生期間の6月　正常産子数879頭に対して哺乳事故151頭、事故率として17.2%　発生が終息した7月正常産子数867頭に対して93頭、事故率として10.7%であった。

また細菌検査の結果、SEの原因菌である*Erysipelothrix. rhusiopathiae* 2a型が検出され、本症例を豚丹毒と確定診断した。

【考察】

本症例ではワクチン未接種群のみで発生し、ワクチン接種群である肉豚に発生が認められなかったことから、ワクチンの効果を確認した。SEは健康豚も保菌している場合があるため、農場の陰性化は不可能とされている。従ってSEの予防としてワクチンを用い農場の豚、全てに免疫を賦与することが重要である。ワクチネーションについては、母豚群で分娩前接種を行い母豚自身に免疫を賦与し更に移行抗体で哺乳子豚から約60日齢までを防御すること、肉豚に関しては移行抗体を考慮して60日齢以降1ヶ月間隔で不活化ワクチンの2回接種を行い出荷まで防御することが望ましいと考えられた。